

昭和戦前期における土産菓子の創出 - 開榮堂のみず漬け・観音もち -

増田公寧¹⁾

Creation of Local Confectioneries for Tourists in the Prewar Period
- A Case Study in Fukaura Town, Aomori Prefecture
MASUTA Kimiyasu

Key Words : 郷土菓子、土産菓子、戦間期ツーリズム、ふるさとの資源化

1 はじめに

本稿では、西津軽郡深浦町で昭和7(1932)年に開業した菓子店「開榮堂」の土産菓子の創案と発売にまつわる証言をもとに、昭和戦前期の土産菓子に「郷土」がどのように表象され、社会情勢の変化に伴って土産菓子の意味と役割がどのように変化したかを確認する。深浦駅開業(昭和9)と五能線全線開通(昭和11年)を契機とする、地場産品を活用した土産菓子の発売と、続く戦時体制下における土産菓子の需要に関する証言は、当時、一部の日本人のあいだで拡大していたツーリズムや、「日本新八景」の選定に象徴される「郷土」の資源化、品評会や博覧会等の開催による地方物産の普及促進といった、昭和戦前期における観光や郷土にまつわる一連のムーブメントの中に位置づけられるものであり、記録する価値があると考えられる。生活者の視点に立った具体的な事例、とくに「聞き取り」による事例の発掘は、本県ではほぼ行われていないという点でも意義がある²⁾。

お話は「開榮堂」の創業者・相馬順三氏(故人)の長女・英子氏にうかがった³⁾。同店の土産菓子については、英子氏の夫・相馬文之助氏(故人)による回顧録が『ふかうら風土記』(深浦町老人クラブ連合会・西崎正孝編, 2000)に収められており、今回収録した内容とわずかに重複するものの、同書に記録されていない多くの事象に加え、その解釈や分析視点についても御教授いただいた。これに伴い、相馬家の蔵に70年以上もの間秘蔵されていた、発売当時の土産菓子のパッケージが発見されたので、併せて報告する。なお、成果の一部は深浦町歴史民俗資料館で開催した連携展「あおもり旅ものがたり」(会期: 2023年10月21日～12月17日)において展示・公開した⁴⁾。



図1 「みず漬け」と「観音もち」(相馬英子氏所蔵)
手前は復刻版の観音もち

2 昭和戦前期における土産菓子の創出

2-1 事例 深浦町・開榮堂の「みず漬け」「観音もち」

(1) 菓子屋での修行

相馬英子さんの父・順三さんは、明治40(1907)年4月1日、深浦町で生まれた。大正8(1919)年、小学校を卒業した順三さんは、弘前の開雲堂(現・土手町、当時は百石町)に見習いとして奉公することになった(12歳)。当初は、奉公先の子どもたちの世話にあけくれ、菓子づくりを直接教わることはできなかった。子守をしながら、目で見て学ぶ3年間であった。4年目から実技を教わり、初めて実家に帰ったのは、5年目の大正12(1923)年8月31日だった(17歳)。

その日はあまりの嬉しさに、夜が明けるのを待ちかねて、友人から借りた自転車に飛び乗り、夜中に弘前を出発し、ほとんど休むことなくペダルを漕ぎ続け、鱒ヶ沢に至って夜が明けた。そして、深浦に到着したのは翌日の昼過ぎだったという。現在のルート(車道)でも片道約70km。舗装などない時代のことだ。深浦の実家に到着したのが、「関東大震災」の当日であったことから、久しぶりに家族に会えた嬉しさと、その後知ったニュースの衝撃によって、順三さんにとって9月1日は「生涯忘れられない一日」になった。

—「私(相馬英子)の父親の相馬順三が、大正8年に弘前の開雲堂さんに弟子入りしたんです。開雲堂さんは、今は土手町で商売してますけど、順三が弟子入りしたときには、百石町でやっていたみたい。そこで最初の3年間は、生まれた子どもたちの世話、守(もり)をしたらいいです。そして段々見ながら、覚えていったみたいで。実際に手を加えた(菓子作りを習うことが

1) 青森県立郷土館主任学芸主査 〒030-0802 青森市本町二丁目8-14

できた)のは、弘前に行って4年目からだったかな。そして、弟子入りして5年目に初めて家に帰ることができて、その日は嬉しくて、弘前を夜中に発って、自転車で弘前から。して、深浦に着いたのがお昼ごろだっていう話で、そしたら関東大震災だっていう知らせが入ったっていうことでした。今でも弘前から深浦っていえば、車でも2時間ぐらいはかかりますよね。それを自転車で漕いでくるっていうんだから、相当な時間。(深浦の実家には)昼頃着いだって言ってました。関東大震災のちょうどそのときに帰って来たどごで、なおさらそれが思い出に残ってるんでないべがね。」

(2)「開榮堂」の開業

順三さんは開雲堂で働いたのち、昭和5(1930)年、故郷に戻った(23歳)。洋菓子の修行を終えた兄・順司さんとともに、深浦町内に和洋菓子店をオープンし、昭和7(1932)年に、独立して和菓子店を開いた(25歳)。店名は、弘前の開雲堂から一字もらって、「開榮堂」とした。

その頃、西海岸では五能線の工事が進んでいた。工事関係者が菓子をよく買いにきてくれたという。そして、昭和9(1934)年に深浦駅が開業すると、観光客が盛んに訪れるようになった。順三さんはその需要に応えるべく、土産菓子を開発した。それが後述する「みづ漬け」である。昭和11(1936)年に五能線が全線開通すると更に旅客は増え、「みづ漬け」は深浦の観光土産として定着していった。



図3 円覚寺(昭和戦前期)

昭和12(1937)年に日中戦争が始まった。しばらくすると、今度は、家族の無事を祈る、あるいは戦死者の供養(『深浦町史』によると、昭和12年の町議会の記録からは、戦時色は感じ取れないが、翌13年には、武運長久の祈願祭、時局講演会の開催などとともに、町民の戦死者の町葬の執行の記録も5件みられるという)⁵⁾のために、澗口の観音さま(円覚寺)に参る人々が増え、寺からほど近い開榮堂の「観音もち」は、参詣のしるしとして売れた。戦後、北洋への出稼ぎが盛んになると、今度は留守を預かる女性たちが講を組んで、観音様や神明様にお参りに訪れるようになり、やはり参拝のしるしとして菓子がよく売れた。土産菓子は「タビの人」(外来者)による需要が基本であるという点はいつの時代も変わらなかったが、五能線の建設中は工事関係者、深浦駅開業(1934=昭和9年)後や全線開通(1936=昭和11年)後は観光客、戦中は兵士の無事や戦死者を供養する家族、戦後は出稼ぎ中の安全を祈る女性たちといったように、客層は社会情勢を反映して変化した。

一方、菓子は地元での需要も高かった。上生菓子は、文人墨客に愛された。また、菓子屋の向かいに銭湯があったことから、襟足を白く塗った風呂上がり遊女たちが、帰りに必ず菓子を買いに立ち寄っていったという。近くに病院があったので、通院客からの需要もあった。芝居見物の客にも売れた。大宅では年に数回、慰労のために使用人を芝居見物に連れてきた。その時に、弁当とともに菓子がふるまわれた。また、結婚式や紀元節(特に、昭和15(1940)年は皇紀2600年にあたり戦意高揚の意図を含めて全国的に記念行事が開催された。深浦町や大戸瀬村では皇紀二千六百年記念行事として、記念奉仕造林が実施されている)⁶⁾、運動会などの学校行事、葬式などの慶

弔時や祝賀行事、学校行事などの際には、紅白の饅頭や鯛や目巻のウンパイなどの大量の菓子の注文があり、順三さんと妻のつるゑさんは、徹夜で作業に追われたという。

また、菅江真澄が「もゝあまり泊たるおほふねの、みな風をまち得て出る」(百隻以上も停泊していた大船が、みな順風を得て出発した:『つがろのをち』)と記したように⁷⁾、深浦港は古くから風待ちの湊として知られ、昭和戦前期においても「吃水浅き船舶若しくは和船の逆風に遭い進行し得ざる時其仮泊所」⁸⁾となって、停泊する船の乗組員は天候の回復を待つて何日か滞在した。その際にお菓子が売れたという。

英子さんの分析によると、菓子の需要は主として、①名勝地を訪れる観光客、②鉄道工事に携わる工事関係者、③冠婚葬祭や行事をおこなう家庭や地域や学校、④天候回復を待つ船乗りたち、⑤観音に兵士の無事を祈る、或いは戦死者を供養する参拝客、⑥旅館を社交場として交流を深めた文人墨客、⑦仕事前に銭湯に通う遊女たち、⑧使用人や人夫たちの娯楽や慰労、⑨通院に訪れる患者、などによるものであったという。

—「開雲堂で働いて、深浦に自分の店を構えたのが、昭和5年。その年に結婚したんだけど、最初は本家(米屋)の兄・順司の家において、一緒に店を和洋菓子店を開いて、兄のほうは洋菓子、うちのほうは和菓子をやったの。それから、昭和7年に

いまの場所に和菓子店を開店したの。弘前の開雲堂から一字をもらって、『開榮堂』って。

ちょうどそのころ、深浦町に鉄道(五能線)が敷かれる、そういう人達の仕事した人がたが、仕事終わってから、うちのお菓子を買いに来てくれたの。その工事が終わると、昭和9(1934)年に五能線(の深浦駅が)開業して、観光客がたくさん来るようになって、一番の理由かどうかわからないけれど、やっぱり、名勝地。景色がいいということで、観光のお土産として売れたの。お土産は、観光客が主体のものだごで、地元の人でなくて、観光客が買って帰るものだから、とても売れたんだって。

それから、菓子屋を開業してしばらくすると、日中戦争が始まったごで、深浦の観音様に無事を祈りに来るタビの人たち(外来者)とか、戦死した人の家族のお寺参りとか、信仰心が強い時代だったので、この界限はお宮参りに訪れる人が多かったの。それが戦後は、亡くなった人へのお参りとか無事を祈るというのではなくて、北洋への出稼ぎが盛んになった時代があったの。その人たちの留守番の人たちが、何人か固まって、観音様とか、神明様とかにグループでお参りしたよね。

それと、太宰治が深浦は文化人の多い町だと書いているように、歌を作る人や作家など、文化人の社交の場になっていたんでないかということ。和菓子は高級菓子だったので、買いに来る人は決まっていました。上生のお菓子は、お茶をやってお菓子好きな人とか、旅館屋に泊まった高級なお客さんに出すものでした。

旅館屋が何軒かあったんですけど、私が小学校のあたりは双葉(ふたば)さんとか、白梅(しらうめ)さんとか、そこに泊まるお客さんたちが土産として買っていったの。私なしておべでるがっていうと、私の家の向かいが立派な銭湯であったの。それで、女郎さんがたが、昼過ぎれば来るの。来たごぎど、帰りの顔が違う(笑)。来るごぎは、ボソッとやって来るのがな、そして帰るごぎは襟足に白一く、おしろい塗ってね。そして、必ずうちの店に寄って、お菓子を買ってくれた。だから、売上げは非常に良かったです。

ごは意外といい湊であったわけ。北前船でも何でも。漁師方がシケになれば、しばらくごに泊まって。天候が悪くなると湊で待つ船がすごかったの。それで、乗組員の方々が何日か泊まるの。

あとね、むかし『小桜』っていう芝居小屋があって、役者さんたちも来たようですが、女中さんを使っている家では、一年に何回かは苦勞をねぎらうために女中さん達に着物を着替えさせて、お弁当を持たせて、『小桜』に芝居を見せに連れてきたんだよね。そういうときにお菓子がふるまわれたり、祝い事があれば、女中さんだとか、山で働く人夫さんたちに、上物のお菓子をふるまったりしていたようです。

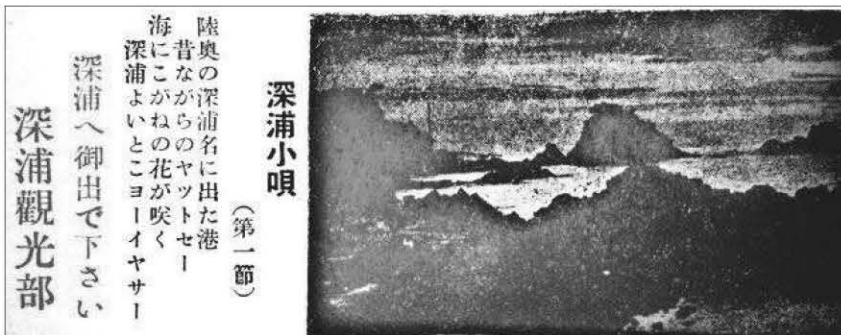


図4 深浦観光へ誘う広告(昭和15年『東奥年鑑』より)

それから、結婚式、紀元節、学校行事なども盛んだった。当時は紅白の饅頭を箱入りで生徒たちに渡してくれたの。当時は、上物の和菓子を作れるのはうちだけだったから、祝言のときはウンペイとか注文あって、目巻とか鯛とか組み合わせで、徹夜で作って納めていました。

総じて、客だねがよかったの。乗組員の方々とか、お参りのお客さんとか、旅行者とか。観音様が近い、湊が近い、そして旅館が近い。訪れる観光客が多かった。」

(3)「みず漬け」と「観音もち」

昭和9(1934)年の五能線深浦駅開業と、昭和11(1936)年の五能線全線開通を契機に考案された「みず漬け」、そして日中開戦後の戦時下において社寺参詣土産として売れたという「観音もち」は、どのような菓子だったのだろうか。残念ながら当時のレシピは残されていない。菓子の形体を推測できるパッケージ(ラベルが貼付された紙函)が、今回の聞き取りに伴って、相馬英子氏宅で発見された(図1,p.103)。これらは、昭和戦前期に実際に使用されていたものであり、ラベルに比べて残りにくい「立体物」であるという点で貴重な資料であるといえる。また、「みず漬け」の木製看板も発見された(図12,p.108)。

①「みず漬け」

深浦の名産である山菜のミズ(ウワバミソウ)を砂糖漬けにした菓子である。英子さんの記憶では、夕方4時頃になると、材料のミズを岡町(おかまち/おかのまち)の女性たちがコダシ(網みかご)に入れて売りに来たという。母親があらかじめ注文していたとみえ、収穫量に応じて代金を支払った。ミズは春先から秋口まで収穫できる山菜であるため、ほぼ年間を通じて安定的に製造できることが利点ではなかったかと英子さんは語る。天然の素材ゆえに長さや太さに違いがあるミズを、1本の長い茎の状態で皮を剥き、菓子として販売する際の箱のサイズに長さを揃えて折り、太さも揃えた。秋田の蒨の砂糖漬けと同様の作り方をしたのではないかと英子さんは考えているが、自身が「みず漬け」に触ったり、試食したりしたことはなかった。幼い英子さんの目には「しなやかな」菓子に見えた。(この点について相馬文之助氏の手記によると、ミズは水分が多いので砂糖で煮染めても固まりにくく、固まったとしても夏場にはグニャグニャになってしまうことが難点であったが、試行錯誤の末に「ポキッと」折れるみず漬が完成したという)9)。「みず漬け」のパッケージは、シンプルな小形の白い箱に、赤・青・黄を基調としたラベルが貼付されている。ラベルは周囲をミズの茎と葉で額のように囲んだ中に、深浦の港と燈台、帆船、波間に遊ぶ鳥などが図案化されている(図5)。モダンで美しいパッケージは、現在でも色あせることない魅力を持っており、往時も好評であったと思われる。



図5 「みず漬け」のラベル
深浦町歴史民俗資料館蔵。以下※印も同館蔵

「みず漬け」の名は、湊町ならではのエピソードに由来する。深浦港が船舶輻輳する賑わいを見せた江戸時代、深浦の町には300名以上の遊女がいたが、赤い腰巻を着用させることで一般女性との区別を図ったという。この赤い腰巻姿を、深浦名産の「ミズ」(ウワバミソウ)の赤い茎になぞらえて、「みず漬け」と称したといわれる10)。

近代以降も同様のエピソードが語り継がれている。当時、「深浦泊りにや碇が要らぬ深浦女郎衆は皆いかり」11)と謳われるように、他国からくる船頭たちにはみな、心をつなぎ止めるような馴染みの遊女があった。しかし船の出入りは5~9月が中心であり、冬場は大鰐温泉や蔵館温泉に出稼ぎに行ったとされる。明治の初め頃には磯崎川周辺に茶店が軒を連ね、大正時代には「小桜」「天下茶屋」「新茶屋」などの大きなお茶屋に30人くらいの遊女がいたといわれる12)。悪天候のために船が何日も停泊することになると、船乗りたちは憩いを求めて遊郭を訪れたが、天候が回復して出航する際、別れを惜しむ遊女たちは、冷たい海水に膝まで浸かり、その膝下が真っ赤になるまで、遠ざかってゆく船乗りたちを見送ったという。その赤くなった足が、山菜のミズの根元に近いほうが赤色を帯びる姿を連想させたことから、見送る遊女たちの姿を「みず漬け」と呼んだ。

菓子の「みず漬け」は、このエピソードにちなむものであることを、順三氏の子息である相馬文之助氏がその手記で明らかにしている13)。この菓子が考案される以前から、山菜の漬物としての「みず漬」もまた、深浦の名産品であった14)。



図6 観音もちラベル(大)※



図7 同左(小)※

②「観音もち」

次いで順三さんが考案した土産菓子は、「観音もち」であった。サイズは大と小があり(図6.7)、「大」は大きさも見た目も、鰯ヶ沢の「鯨餅」に似たものであったという(文之助氏の手記には「観音もち」は笹に包まれていたと記されているが、英子氏はその点は記憶にないという)。

近年、町役場の人によって観音もちの復刻が提案され、平成17(2005)年に深浦町観光協会から発売された。復刻版の「観音餅」のサイズは、かつて販売されていた「大」の3分の1ほどのサイズで、ノーマルの「復刻観音もち」(鯨餅に似た色合い)に加え、「黒ごま入り観音もち」(黒色)、「浜小屋の手作り味噌入り観音もち」(黄金色)を加えた3種類である(図8)。製造は鰯ヶ沢町の「銘菓の店・山ざき」である。店主の山崎康裕さん(昭和42年生まれ)によると、復刻の依頼を受けたものの当時のレシピが残っておらず、「鯨餅のようなものだった」という証言をもとに、うるち米ともち米の粉を使用し、いろいろの製法を応用して創作したという。深浦町の特産品として認定を受けるために、うるち米は深浦町産を使用している。

発売以来、深浦町観光協会が入居していた「風待ち館」と「ウェスパ

椿山」で長らく販売されていたが、現在は旧ウェスパ椿山にある「コロボックル」でのみ販売されている。価格は1個130円で、6個入800円・9個入は1200円の箱入りもある¹⁵⁾。

— (英子さん)「私の記憶にあるのは、むがし、夕方になれば3人が4人の、岡の町って上の町の女の人達が、家の小上がりに並ぶの。そうせば、コダシっていう編み物の入れ物から、山から採ってきたミズを並べれば、母親がその代金を払ったの。頼んでたんでないべがね。採(と)に行って来てくれねがって。夕方、4時ごろだべがね。オラせばそこに座って、その様子見でだの。

秋田の、砂糖菓子(露の砂糖漬け)とおんなじ作り方たんでねえがって。ミズはだいたい春先から秋口までであるどごで、年間通して作るにいがったんだべね。普通オラだち食べるどぎは、こう(皮を)剥いで、ポクッと折って、次また適当な長さで折ってって、この長さで皮を剥ぐんだけど、

みず漬けの場合は1本まま皮をはぐの。そしてその箱にあわせた寸法にするわけ。太いのや細いのがあっても、売り物だから、ある程度同じ太さのものを用意してね。見た感じはしなやかだど思っただよ。食べた記憶はないの。よく半端物は食べるわけ。だけどみづ漬の場合は、触れば弱いものだったんでねべが。子どもにはあまり食べさせなかった。

観音もちは、大と小あって、どっちも、一本ずつ入ってました。大きいのは(今も鱈ヶ沢で売られている)『鯨餅』と同じくらいの大きさのものが入ってました。以前、(深浦町)役場の人が来て、この餅(商品として再び世に)出してもいいがって、それで、相談して。復刻することになったんです。」



図8 復刻された「観音もち」

(4)二人三脚での菓子作り

生菓子は、和菓子屋で修行して技術を習得した順三さんだからこそ作れる菓子であり、腕のみせどころであったが、その需要は限られ、生業として成り立たない。そこで、「みづ漬け」「観音餅」などの土産菓子に加え、饅頭や煎餅、飴などのさまざまな雑菓子も製造した。それらの菓子作りは、英子さんの母・つるゑさんが精力的に手伝った。例えば麦饅頭であれば、饅頭の表面に焼き印を入れる、数を数えて納品する、などの作業はつるゑさんが担当した。飴であれば、棒状に練った飴を糸で切ってローラーで丸めた。煎餅であれば、竹ペラで10枚の煎餅型を次々にひっくり返しながら、炭の窯で焼き、つるゑさんがそれをザルに上げた。石づくりの「パン窯」(開榮堂ではパン自体は作らなかった)の前に置いた台の上で、木鉢を使って菓子の材料を捏ねたり、ガラス蓋のついた陳列ケースに菓子を並べたりする作業もつるゑさんが担った。精力的に父の菓子作りを助けていたと、英子さんは回想する。まだ4～5歳の英子さんは、菓子づくりを手伝ったことはなかったが、女中さんに子守をしてもらいながら両親の様子を眺め、ときには貰って食べることもあった。

— 「生菓子を作るのは、絶対に父親でなければならなかった。竹のヘラ一本で椿でもなんでも作ってました。でも、そういう(上物の)作り菓子ばかりだと生計が立たないので、饅頭、せんべい、あめ玉など、いろいろなものを作っていました。そういうお菓子を作るときは、母親が手伝いました。父親が種を作って、母親がその上に飾る判を押すとか、例えば麦饅頭あたりでも、焼き印を押すんだよね。栓か何かの葉っぱの形の。炭を入れたコテを当てて、形を押すわけ。お菓子の数を数えて納品の仕事するとか、母親は本当に父親を助けていました。

他にも例えば、あめ玉作るのは、糸を口にくわえて、棒状に練った飴をこういうふうに通して切っていくわけ。そしてスノコみたいな、ローラーみたいなをかけてやると、丸くなるの。それから、せんべい。竹のヘラで10枚のせんべい型をひっくりかえしながら順々に、炭を起こした窯で焼いて、母親がザルにあげて、そういう仕事が多かった。

それから、『パン窯』というものもあった。作業場に行くと、石でつくった釜があって、ツバガマと鍋かける二つの口があって、その前に卓球台のような台を置いて、木鉢でこねものをしたり。蓋をあけるガラスの折(菓子陳列ケース)があって、そこに菓子を並べるのが母親の仕事でした。

その頃(昭和12～13年ころ)は、(私はまだ)4つ(歳)がそごらのあたりだどごで、危ないからとか邪魔になるというので、女中さんに子守をもらいながら、父と母のお菓子作りのようすを遠目で見ていたので、直接手伝ったことはないけど、ちょこちょこ行って走って行って、貰って食べて(笑)。」

(5)戦前～戦中・戦後の物資不足と製菓

深浦町内には菓子屋が8軒ほどあった。パンチュウ、チャイ店、アメヤなどの通称で呼ばれていた。英子さんの証言と、故・文之助氏の手記によると、当時町内にあった菓子店は次のとおり(順不同)。

- ・相馬菓子店(開榮堂・相馬順三)
- ・入平菓子店(銘菓 岩の友:ワカメの砂糖煮)
- ・佐藤菓子店(通称 アメヤ)
- ・後藤菓子店(2店舗あった)
- ・相馬菓子店(洋菓子店・相馬順司)
- ・住吉菓子店(通称 パンチュウ屋)
- ・平沢菓子店(通称 チャイ)
- ・山中菓子店(ワカメ羊羹)

小さな町に多くの菓子屋があった理由について、英子氏は「開榮堂の開業」(本稿2-1(2),p.104参照)で列記した9つの理由を挙げる。菓子需要の高まりに応じて、菓子屋も多くなったようである。しかし、戦況が悪化するにつれ、金属製品である菓子の製造用具が国によって回収され、また昭和15(1940)年には小麦粉や砂糖の配給統制により原材料の入手が困難となった。当時、砂糖の配給量が減少した理由は①内地へ米を供給するために台湾における甘藷栽培が稲作へと転換され、加えて製糖設備が老朽化によって砂糖の生産量が減少したこと、②台湾から内地への輸送力の低下、③(昭和18年以降は)航空燃料の生産に向けられたこと、が挙げられる¹⁶⁾。



図9 「ささ舟」ラベル※

小麦や砂糖が不足したわけ。それで煎餅を焼く鉄の煎餅型とか、菓子の器具とか、あらゆるものが没収されたわけ。ここいら近辺の人は、お菓子屋さんだけでなく一般の人たちも、あらゆる『鉄』と名の付くものを国に納めて。鉄砲の弾になったか、軍艦になったか、飛行機になったか分からないけど、そうやって(どこの菓子屋も)廃業に近い状態になったの。その頃から、深浦町の菓子共同組合だったか、細長い木の看板が、今の相馬電気のあたりに掲げられて、その場所で、国から配給になった菓子の材料を使ってお菓子屋さんたちが共同で菓子作りしたの。個人の菓子づくりは出来なくなったの。それから、菓子屋でも、戦争にとられ人(徴兵)も多かったんだよね。それで廃業になる店もあった。」

(6)「開榮堂」の開業

英子さんが小学生のころ、布団に入りながら寝付かれずにいると、静かな闇の向こうから、家の傍の砂利道を歩く漁師たちの雪駄の音が聞こえてきた。その音はなぜか淋しげに聞こえた。作業場では両親が夜がふけまで仕事をしていた。とりわけ慶弔時には大量の注文があり、夜を徹して菓子作りに励むことも多かった。無理がたたったのか、目に見えて父親の体調が悪くなっていった。その分、母のつるゑさんが奮闘した。だが英子氏が12歳のころ、ついに順三さんは倒れ、仙台の大学病院に入院することになった。母・つるゑさんに連れられて面会に行ったとき、病院の食堂の前でつるゑさんと手を繋いで佇んでいると、哀れな母子だと思われたのだろうか、『お嬢さんにこれで食べさせなさい』と、外食券をくれた女性がいた。ものがない分、人のやさしさに助けられた時代だったと、英子さんは振り返る。

菓子製造業では企業整備が2度にわたっておこなわれ、第一次企業整備(昭和16年10月～)では全国の業者数が約10万から2万に減ったが、廃業が組合員同士の企業合同かを整備対象者が自身で選択できたことから、「自治的」企業整備であったと言われる¹⁷⁾。この頃、深浦を含む西郡では「西津軽郡菓子工業組合」が発足した。当時の組合員数は108名、英子さんの父・順三さんは監事として名を連ねている¹⁸⁾。『青森県菓子共同組合史』によると、昭和18(1943)年に西津軽郡では46名が軍需産業へと転業するか廃業し、残62名が企業合同をおこない、深浦地区では「深浦製菓会社」(代表:平沢秀松)が設立されて菓子を製造したという¹⁹⁾。同年6月の「戦力増強企業整備要項」にもとづく「菓子製造業企業整備要項」および同「実施要領」の通達による第二次企業整備は、政府が都道府県の整備率を決めて計画実行する強制的な企業整備であり、企業合同も禁じられた²⁰⁾。徴兵による廃業もあった。

—「当時(戦前～戦中にかけて)、この小さい町で、(私が)覚えているかぎり、(菓子やさんが)8軒ありました。パンチュウ屋、チャイ店とか、お客さんがこう(愛称で)呼んでいたんだよね。入平(いりひら)さんって、おそば屋さんがあったんだけど、そこもお菓子屋さんだったのね。(戦争が始まると)菓子に使う



図10 「みず漬」の看板(相馬英子氏所蔵)



図11 「観音餅」の看板(相馬英子氏所蔵)

退院して親子3人、汽車で深浦に帰る途中、木造の駅前の店で、順三さんがおやきを買ってくれた。甘いものをしばらく口にしていなかった英子さんは、おやきを一口頬張ると「ああ、しばらくぶりだなあ」という感慨がこみ上げてきた。父が作った菓子を除けば、いままでで最高の菓子のように感じた。しかし同時に、「お父さんも、もうお菓子を作ることはないんだな」という現実を、そのおやきが物語っているようにも思えた。

仙台の病院では、順三さんはもう助からないと言われたが、青森の市民病院に名医がいるというので転院して手術を受けた。肋骨の切除と腎臓の摘出という大手術であったが、医療も薬も満足でない戦後の混乱期にありながら、奇跡的に一命を取り留めた。

命は助かったものの、栄養も薬も不足し、自分の力で生きていくということがやっとならぬという状態であった。もちろん、菓子など作れない。戦中の物資不足により、菓子の製造が難しくなっていたという社会的な事情も重なり、「開榮堂」を閉めることになった。

—「私が小学校に入るとき(昭和15年ころ＝満7歳ころ)、ああ、漁師方(がた)が来たなあっていう、思い出がある。床に入ってもなかなか寝付かれないでいるとき、漁師方が履く雪駄の、舗装していない道路を歩く音で、淋しげな音がするの。ああ、淋しいこの音、雪駄の音さみしいなあって、小学校のときにそう思ったの。その時はまだ母親と父親が仕事(夜業)していて。ずっと遅くまで。(祝言の菓子などは納期があるので両親が徹夜で作ったのね。そのあたりから、家の父親が具合が悪くなって、(無理がたたったのか)体の調子が崩れていったみたいなんだよね。それで母親がすごく奮闘したって。

そして、女学校に入る前の年か2年前くらい(昭和20年ころ＝満12歳ころ)だが、そごいらへんで、腎臓の摘出手術をしたの。父親が死ぬような状態で、もう助からないということで、仙台の大学病院に入院した父親に、面会しに母親に連れられて行ったの。それで母親の手をつかんで大学病院の食堂の前に立ってたら、子どもづれの哀れな母親だと思った人が、『お嬢さんにこれで食べさせなさい』って、2日分の甘酒の切符と、母親にはうどんだったかそばだったか。みんな人の世話になって。終戦後で何を買うにも切符だった。包帯を買うのも食堂も。

退院して仙台から帰る途中、木造(きづくり)の駅に下りて、駅の右側にあったオヤキの店で、(私が)ゴンボほれば(機嫌を損なうと)ダメだということで、父親がおやき買ってきて。ほとんどモノがない時代だったごで、オヤキが最大のお菓子だった。父親が作った菓子以外では。それが、しばらく甘い物から遠ざかっていたので、なんだかお菓子って、『ああ、しばらくぶりだなあって』感じて、『えの父親も、もう作ることはないなあ』と思ったのが、ちょっと悲しかった感じだね。

それで、父親がもう死ぬ(可能性が高かった)ごで、青森の市民病院に転院したの。親戚が院長をしていたし、外科部長に立派な軍医がいるというので、市民病院に連れて来たんだべおん。そして肋骨を切除したわけ。そしたら、死ぬか生きるかというのが、助かったの。医療も薬も不足している時代に、持って生まれた運なんだが、まわりの人に助けられて、いい人にめぐりあって、母親も献身的な看病したからかな。

生菓子は作れない。もうそのときは、営業するだけの物資もなかった。作る材料がないときに、おじちゃ(父親)が悪くなったごで、ちょうどいいってへば何だけでも、あっさりど(菓子屋を)諦められだんでないべが。」

(7)食料雑貨店の開業

戦後は雑貨店として新たなスタートを切った。商品は主に弘前から仕入れた。英子さんは弘前の高等女学校に進学し、当地のお婆の家に下宿していたことから、順三さんから電話で指示を受けて仕入れた商品を、休日に弘前から深浦まで運ぶこともあった。当時は物資の取締りが厳しかったが、セーラー服を着た女学生である英子さんが、警察に荷物を検分されることはなかったという。

雑貨店はいわゆる「なんでも屋」であり、菓子も販売した。菓子も扱ったのは、和菓子職人であった順三さんを楽しませたいという思いもあったのではないかと。菓子は能代や弘前の菓子屋から仕入れ、化粧ビンに移し替えて量り売りした(「バラ菓子」)。

慶吊用の注文があると、紙袋に小分けして納品することもあった。しかし、次第に菓子自体がすでに袋に入った状態で卸されるようになり、棚ひとつあれば誰でも菓子を商えるようになったことから、菓子を扱う店は増えていった。

パンも販売した。深浦町内では柿本菓子店(戦後に開業)が名産「わかめ羊羹」とともにパンを製造しており、そこから仕入れた。あんパンやジャムパンなどが子どもたちに人気だったという。

羊羹は、能代の東雲羊羹を仕入れた。深浦には、能代の行商人が毎日のように訪れ、注文を受けては、卵などの食品や下駄の材料から洗濯物(クリーニングのサービス)まで、さまざまな品物を卸していた。戦後の五能線は、そういった行商をなりわいとする、いわゆる「ガンガン部隊」であふれていた。南は能代、北は木造や五所川原まで、深浦と各地を往復して物流を担っ



図12 深浦町の商店街(2023年)



図13 相馬英子さん(2023年7月撮影)

た。深浦の港で水揚げされた魚介類を朝一番の列車で各地の注文者へ運び、帰りは能代や木造、五所川原などの都市の品物を深浦に持ち込んだ。列車の中は、ガンガン部隊と荷物であふれた。積み上がった御用カゴの上に更に風呂敷包みが頭の高さを超えるほどに積み上がったという。

能代の東雲羊羹については次のような証言もある。浜町(はままち)で生まれ育った西崎公慶さん(昭和34年生まれ)によると、深浦の人が能代へ行ったときのお土産として認識されていたという。小学校3~4年生の頃、西崎さんの親戚が、能代から土産として買って来た東雲羊羹を、よく仏壇に供えていた。深浦の人々にとって「能代」という場所は、人と物がひっきりなしに行き来する非常に身近な場所である一方、お土産(訪問のしるし)を買って帰るような距離感もあったようだ。

— 『開榮堂』の閉店後、父は『なんでも屋』を開業しました。品物は、主に弘前の商店から仕入れてました。私も戦争(が終わった)の次の年(昭和21年=満13歳)から、弘前の母の妹(おばさん)の家に住まわせてもらって、弘前の高等女学校に通学していました。それで、足りないものがあつたときは、弘前から仕入れて来てけねがって、父親が私に電話かけでよごすので、学校の休みを利用して、仕入れて(深浦まで)運んだの。当時は、何でも売れたの。ロウソクだとか、必要必需品はすぐ売れたの。夏休みとかマッチだとか、そういうの。持ってきやすいごで、買ってこいって

いうわけ。へば頼んで、仕入れて私、汽車で帰るときに買って持っていったの。あの時代、汽車の網棚にモノ上げれば、警察がまわってきて、全部降ろさせて、捨てらせだの。警察まわって来れば、(私は)セーラー服着たままで、黙ってこうしてるの。巡査が『これは誰のだ』『わたしです』『ああ、んだが』。素通りだもの。なんも摘発されなかった。セーラー服だったから(笑)。

『開榮堂』は閉店したといっても、お菓子との縁も切りたくないごで、能代や弘前の菓子屋から、菓子を仕入れて売ったの。でも、今みたいな袋菓子でないの。秤で売るの。紙の袋に入れて、何円って。バラ菓子。一斗缶に入ってくるバラ菓子を、化粧瓶に入れて、量って。店で菓子を売ること、(和菓子職人であり菓子屋を営んでいた)おじいちゃん(順三)を楽しませることができた。でも、しばらくして、卸屋さんの様式が変わったの。量り菓子から袋菓子になったごで、棚さえあれば、袋菓子注文して飾ればいだけになったの。昔はお祝いごとでも通夜でも、お客様に袋菓子渡すのは、量り菓子で、袋に詰めて、くるくるくるって両方を捻って、箱に詰めて注文の数だけやったごで、量り菓子も売れたけども、それから何年かたったら、卸屋自体が袋菓子になったの。だから、量る必要がなくなった。それは何年頃からそうなったかわからない。

あとね、仕入れて売ったのはパン。深浦にパン作る人あつたの。柿本さんって。パン以外にも羊羹(「わかめ羊羹」とか作ってあつたけど、うちでだば、柿本さんからはパンだけ仕入れたの。何でかっていえば、あのあだりパンが珍しかったがら。戦後、パンが流行りだしたの。あんパンと、グローブみたいな形のジャムみたいなのが入ったパンと、芥子の実がついたのと、……。

羊羹は、能代の「東雲(しのめ)羊羹」を仕入れて売ったの。毎日、男や女の人達が何人も深浦町さ入ったの。『今日は御注文ないですか』ってせば、能代のほうの人が、直接作っているところから仕入れて持ってきてくれるから、東雲羊羹20本とか、卵とか、その人がたに、いろんなもの何でも頼むの。今日は東雲羊羹、下駄屋の人はつま草とか、洗濯屋を頼んで洗濯してもらうとか。

五能線づごは、戦後はガンガン部隊と学生でいっぱいだったの。うん。夜、船が入ってくれば入札して、お客様から注文を受けたものをアサマに荷造りして、一番の汽車で持ってぐの。そして注文したごごき置いで、そっちがら今度、五所川原だば五所川原にあるものを持ってきて、こっちで注文受けたもの置いでぐとか。ガンガン部隊は、ここいら辺一帯の年寄りの人達ほとんど行ったよ。能代方面と、こっちは遠くて木造、五所川原だったんでないべがね。弘前まで行ぐってば、汽車が4時間くらいかかるの。オナゴもオドゴも、御用籠の上に、更に包んだもの上げで、もう頭よりも上に積み上げて。だけどその人達も相当稼いだの。主たるところは魚、帰りは都会にあるものを持ってきて。」

(8) 孫は最大の「くすり」

開榮堂の看板を下ろし、食料雑貨店として新たにスタートした戦後、順三さんは、家では一日中横になって過ごすことが多く、食事でも排泄も簡単ではなかった。しかし、英子さんの長男・博さんに子どもが次々と生まれると、目を見張るような回復を見せたという。英子さんは「孫が最大の薬だった」と語る。父はただ傍にいて、エンツコに入った孫の子守をしているだけだったが、孫から「生きる力」をもらったのだとつくづく思う。順三さんは、平成10(1998)年12月9日に91歳の長寿を全うしてこの世を去った。

— 「父親がお菓子を作れない体になってから、命は助かったけれども、栄養や薬が不足で、ずっと病人だった。自分の力

で生きていくのがやっという感じだった。何もできなかったの。ただだまってここに横になって、仕事もできなくて、やっでご飯食べて、おしっこのほうの病人だったごで、尿瓶は離せない。そういう生活していたんだけど、順三(父親)にとって最大の薬があった。何だと思う？ 一孫。長男に子どもが次々生まれたの。その子どもをエンツコに入れて守(もり)させたの。なんもさねくても、危なぐさねように、見てればいい。それで、私が思うのに回復したの。孫から生きる力もらって、長生きして。その孫をみて、生きたの。薬よりも何よりも、孫の力っていうのは最大の薬。」

2-2 「みず漬け」「観音もち」が生まれた時代

(1)昭和戦前・戦中期のツーリズム

「開榮堂」が創業した昭和戦前期は、度重なる凶作や恐慌、自然災害、クーデターなどが生じた、不穏で暗いイメージが漂う時代である。特に地方の農村部では経済状況の悪化がすすみ、更生に向けた取り組みがおこなわれていた。一方、都市中間層においては観光旅行がブームとなり、日中戦争(1937-)が始まったのちも旅行熱は留まることを知らず、昭和15(1940)年～昭和17(1942)年ころがそのピークであったといわれている²¹⁾。「日本人」(といってもごく一部の日本人についてであることには注意を要するが²²⁾)にとって一律に「暗い谷間の時代」などではなかったとする解釈が、従来のモダニズム論とは別の視角を提供するものとして、研究者によって示されている。

たとえば、高岡裕之によると、戦間期に発展したツーリズム(都市生活者における大衆現象としての旅行)は、一般に考えられているように戦時体制下で抑圧され衰えたわけではなく、むしろ国民の身体的強化と思想統合というファシズム的民衆統括の一環として拡大し、また民衆の側も、表向きは心身鍛練・志操涵養という題目に従いつつ、内実は日常生活からの解放と娯楽を目的として積極的に旅に出ているという。そのピークは昭和17(1942)年であり、伊勢参宮や富士登山は空前の参拝者数・登山者数をマークしたという²³⁾。

ゲネス・J・ルオフも、同様の視点で当時の大衆旅行を分析している。戦時下の日本で観光や出版、小売業などの消費文化が最も盛んになったのは昭和15(1940)年であったとい²⁴⁾、とくに旅行ブームは1930年代(昭和5～15年)になっても衰えず、その傾向が昭和17(1942)年まで続いていたという²⁵⁾。同氏は、この時代に建国聖地巡拝などの名のもとに行われた旅行が、愛国主義と結びついた国民の自発的で主体的な行動(大衆消費主義)であった点を特に強調している²⁶⁾。

「団体旅行」の歴史と文化について論じた山本志乃は、戦前・戦中期の修学旅行が、伊勢参宮を名目として昭和18(1943)年6月という戦中期まで続いていたことを示し、軍国主義や国家主義による、大衆の旅行文化の「抑圧」という構図とは別の見方が必要であることを示唆している²⁷⁾。

大正昭和初期の旅行文化を「旅行のモダニズム」という視点で論じた赤井正二は、この時代に①旅行の目的が手段とのリニアな関係性から円環的關係へ、すなわち自己目的化したこと、②近代登山(登拝からの宗教性の脱色＝自己目的化)に象徴されるような、新たな美と感動の再発見によって旅行のテーマが拡大したこと、③鉄道院・鉄道省の主導による旅行の産業化・制度化が進化したこと、という3つの動きが互いに影響しあいながら、ツーリズムが急激に拡大・発展したことを述べている²⁸⁾。昭和13(1938)年には、総力戦体制の一翼を担った「厚生運動」の枠組みのなかに、旅行や観光に関する政策が組み込まれ、体位向上、心身鍛練、祖国認識などが旅行の目的として位置づけられたが²⁹⁾、その厚生運動の一環として提唱された「青年徒歩旅行」、そして「敬神崇祖の旅」という時局に乗じた旅のスタイルは、「近代性の衰退の面もあるが、実態は必ずしもそのようなものではなかった」³⁰⁾と述べ、内実は息抜きすなわち娯楽の側面があったことを資料に拠って示している。更に昭和15(1940)年の旅行規制開始から戦時陸運非常体制(昭和17年)時に至ってもなお、「規制をかいくぐる脱法的な行為が広範に広がっており、温泉地は旅行客でごった返していたという³¹⁾。それを斡旋する旅行業者700社以上の活動も継続されており、戦勝祈願等の名目で温泉への遊覧旅行を手配する業者もあった³²⁾。

このように戦時下においても、内実は娯楽を目的とした「旅行ブーム」が、一部の日本人の間では続いていたとする解釈が、研究者によって示されている。これらはいずれも日本全体を総括した視点で述べられており、県外から青森県を訪れた観光客数の推移や動向、青森県民の動静について具体的なことは明らかでない³³⁾。

(2)交通の整備と「旅」の変化

柳田國男は昭和9(1934)年の講演で「日本人は世界何れの國の人にもまして、よく旅行をする國民に今はなつて居る」、(用向も多いかもしれないが)「少なくとも半分又は四割以上は、所謂旅行の為の旅行をして居る」³⁴⁾と述べている。このような、旅行の大衆化の「量的」側面における変化をもたらした背景には、言うまでもなく明治以来の鉄道をはじめとする交通インフラの整備がある。鉄道は明治5(1872)年に新橋－横浜間が開通し、明治22(1889)年には新橋－神戸間が開通している。本県でも、すでに明治半ばに日本鉄道上野－青森間(明治24:1891年)、青森－弘前間(明治27:1894年)が開通しており、続く大正から昭和初期にかけては、青森市交通部(大正15:1926年)、弘南鉄道(昭和2:1927年)、五戸電気鉄道(昭和4:1929年)、省営バス十和田線(昭和9:1934年)が開通し、更に、本稿に深く関わる事案としては「深浦駅開業」(昭和9:1934年)、「五能線全線開通」(昭和11:1936年)など、公共交通の整備が一層進んだ。

一方で、柳田國男は、鉄道がもたらした「旅行の大衆化」の「質的」側面における変化については、「旅行道の大いなる衰頹」という表現を用いて論じている³⁵⁾。すなわち、旅は「金を溜めなければ企てるもので無い」もの³⁶⁾、すなわち非日常的な観光旅行へと変化し、日常的に往来する行商に象徴されるような、「世間知識の外からの補給」³⁷⁾による中央と地方、地方と地方間の日常的な「人と人」との交流、またそれに伴う「情報」の往還、という旅の持つ意義が、急速に衰頹していこうとしていると論じた³⁸⁾。同時に、「自轉車の出あるきと近いもの」「移動する宴會のやうなもの」「出来るだけ自宅と同じやうな生活をする事」、窓の外に広がる景色を見るでもなく、寝ているかキングを読んでいるかといった「車中の生活を無価値に」して³⁹⁾、単に目的地に到達することをよしとすること、などへと旅の目的が創造的なものから従属的なものへと単純化されつつあると述べた⁴⁰⁾。つまり柳田國男が旅行道・旅行術の「衰頹」として捉えたのは、①旅の日常的意義の喪失と②旅の目的の単純化であった。

旅、或いは旅人のこのような質的变化は、①においても②においても、受動的態度への変化であり、風景でいえば一方的に見せられるもの、情報でいえば一方的に与えられるもの、いわゆる「名所」「名勝」の類いに甘んずる態度への変化であった。誰が行っても必ずよい景色⁴¹⁾、などというものはない。「名所」「名勝」は無用の拘束であり、最も「押しの強い押し売り」「風景の標準」「風景の流行」「風景を指定して貰おうとする客引き根性」であると柳田はいう⁴²⁾。「日本三景」などの名所の激賞は、風景を觀賞する旅人の創造的探究的な態度を奪うことになり⁴³⁾、風景の「押し売り」に気づかないような「感覺の稀薄なまけ者ばかりを、何千何萬とをびき寄せて見たところが、(中略)風景は到底日本一にはなれまい」と説く⁴⁴⁾。時代は異なるが、柳田が旅人にみた質的变化と同様の現象を、D・J・ブーアスティンは「トラベラー」から「ツーリスト」への変化と捉え、自ら能動的に目的を切り拓きダイナミックに旅を創造する「旅行術」(アート・オブ・トラベル)の「喪失」であると評している⁴⁵⁾。柳田がいう「風景の押し売り」は、ブーアスティンの言葉を借りれば「我々に売ろうとして誰かが企てた、作り出された経験」⁴⁶⁾と言い換えられる。「日本新八景」「青森県八景」などはまさにそのような側面を持つイベントであった。

しかし、柳田國男は一方で、旅(ツーリズム)の娯楽化・大衆化の肯定的な側面をも併せて論じていることに、注意を払わなければならない。すなわち、「遊覧の客」つまりツーリストになることで、籠居を甘んじていた人々に世間を知らしめ⁴⁷⁾、地方に新たな生活様式を付与し⁴⁸⁾、「新たな一道の生氣を送り入れた」⁴⁹⁾、という積極的な価値も同時に見いだしており、新しい旅行様式が持つ可能性を示唆している。「旅を或一地に到着するだけの事業にしてしまはうとするのは馬鹿げた損である。(中略)旅行を愉快にする権能は實は諸君の手中に在るのである」と、観光旅行が持つ可能性に期待を示している⁵⁰⁾。また「風景競争」(昭和2年の「日本新八景」の投票を念頭においたものと思われる)という「景觀」の格付けとお墨付きの企画が、逆に、「人に教えてもらったのでは仕方が無い」という考えを旅行者の中に喚起し、自分自身の好みで選択することが盛んになってきたと見ることも可能だと述べている⁵¹⁾。つまり、柳田は、「旅行道の衰頹」という表現を用いながらも、当時の大衆現象としての観光旅行(ツーリズム)の盛況を、前代の旅との比較によって単に「衰頹」と見なし批判しているのでは全くなく、その両義性を論じていることに注意したい⁵²⁾。

(3)「郷土」の発見・発明

交通インフラの整備により、人々が以前よりも気軽に、娯楽を目的とした旅行に出られるようになった結果、人やモノや情報が中央から地方へ流入する速度は、以前よりも量も速度も格段に増した。ラジオの普及もそれに拍車を掛けた。本県では、昭和13(1938)年2月に弘前放送局が開局している⁵³⁾。この流れはしかし、柳田國男が指摘するように、「中央の消息ばかりがたゞ急劇に流れ込む」⁵⁴⁾ような、圧倒的に一方向的なものであり、地方はひとえに受動的であったために、東京と地方都市との文化的な均質化を招くことになった。その「反動」として、ある種の郷愁を伴いながら「郷土」の意識がより鮮明なものとなり、ときに積極的・主体的な運動・活動として現れた。

「博覧会」を通じて大正昭和期の世相を論じた山路勝彦によると、この時期に地方博覧会が数多く開催されたこと背景には、鉄道と情報網の整備による均質化への反動としての「地域の独自性」を追求する動きがあったという。同時に、(明治期には殖産興業にはじまり娯楽性を増していった博覧会が、昭和初期になると)当時の不況を克服するための国産振興策と相乗して、地場産品宣伝の格好の機会として捉えられ、「郷土」と「観光」のテーマを前面に押し出した地方博覧会や共進会の開催が盛んになったという⁵⁵⁾。博覧会・展覧会の一環である明治時代以来のデパートの名産陳列会も盛んに開催され、常設の物産陳列所(現在のアンテナショップに相当)も、この頃(昭和初期)に出現した⁵⁶⁾。本県でも、物産陳列所の新たな開設や物産会・共進会の開催、各地での県産品のプロモーションが盛んに行われた。戦時下である昭和15(1940)年には、県外への短期出張展示を含めると実に県内外16ヶ所で本県関連の物産展・共進会等が開催されている⁵⁷⁾。

教育の面では、昭和5(1930)年に文部省普通学務局が全国の男女師範学校に一枚あたり1,000～2,000円の補助金を交付することによって、「郷土室」の設備を奨励した⁵⁸⁾ことをきっかけに、郷土教育運動が高まりを見せた。その高まりは昭和4年頃から10年近く継続し、昭和17～19年という戦中にあっても「郷土教育運動の余熱は当時もおさめやらずにいた」という⁵⁹⁾。昭和戦前期から戦中にかけては、郷土博物館・地方博物館の建設運動が全国的なブームで、発足まもない日本博物館協会もこれを推進した。昭和4(1929)年の発行の機関誌「博物館研究」によると「郷土博物館」の目的と機能として、①資料の保存展示による学術振興、②実物資料を通じた社会教育、③国土・郷土の紹介、④愛国心・愛郷心の涵養、が謳われ、「御大典記念事

配の慣習」に即応できることも土産の条件であった⁸⁵⁾。言い換えると、①現地を訪問した旅のしるし(証)となること、②分配できること⁸⁶⁾が土産の条件である。

神崎が対象としたのは主に近世期におけるおみやげの成立であったが、その後の時代すなわち近現代に重点を置いて日本の「おみやげ」文化を論じたのが鈴木雄一郎である。鈴木によれば、「みやげ菓子」の成立には、①鉄道、②博覧会、③軍隊という近代的システムが大きな役割を果たしたという⁸⁷⁾。まず、①鉄道網の発達、菓子を含む「食品の土産」の範囲を、大幅に拡大させた⁸⁸⁾という主張は、上述のように神崎がすでに論じているところである。次に、②博覧会は、名物・名産を産地から離れた場所に一堂に集めて審査する場であったことから、比較・競争することで名物・名産の独自性が育まれたという⁸⁹⁾。また、③軍隊が果たした役割については、戦争と結びつく物語の利用による知名度の向上や、軍納による流通拡大を挙げている⁹⁰⁾。①②③の条件によって、地域の食品、特に菓子が土産として発達した。鈴木は更に、「みやげ菓子」の構成要件として「地域特性」(地域性)、「観光資源」、「地場商品」(地場産品)の3つの情報を挙げる⁹¹⁾。これらはいずれも「郷土」によって表象されるものである。

これら3つの情報は「地域資源」というひとことで言い換えられるが、国立歴史民俗博物館で2018年に開催された特別展「ニッポンおみやげ博物誌」では、地域資源を活用した現代のさまざまな土産を、それまでにない独自の視点で分類する試みが行われた。担当した川村清志は、土産を①自然(風景や景観を含む)、②建物・場所(古社寺、遺跡など)、③有形文化財(民芸品、郷土玩具など)、④無形文化財(方言、民謡、伝説、祭り・芸能など)、⑤人物・キャラクター・物語、身体(「性」を含む)の5つに分類している⁹²⁾(本稿で取り上げた事例では、「みず漬け」が①、「観音もち」は②に分類される)。

これらの土産に共通して顕著な特徴は「非常に定型的な様式へと収斂して」いる点である⁹³⁾。鈴木雄一郎も、鉄道、博覧会、軍隊、という近代的装置は、全国的に「名物のおみやげ化」を進展させると同時に「平準化、均質化」をもたらすという両義性を持っていた⁹⁴⁾と論じており、その傾向は早くも明治後期に現れ始めていたようである⁹⁵⁾。それは皮肉にも、土地の名物・名産を土産にすることを可能とした、それらの近代的装置、なかんづく鉄道の発達がもたらした物流の広域化によるものであった⁹⁶⁾。つまり鉄道の発達は、みやげの地域性・独自性を創出すると同時に、みやげの平準化・均一化をも、もたらしたのであった。全国的には、昭和14(1939)年にはみやげの均質化が「問題」とみなされるまでに顕著になっていたようだ⁹⁷⁾。ヴォルフガング・シヴェルプシュは、「生産と消費とが、同じ場所に結びついているかぎり、(略)商品は、それが生産されて消費される場所の特色を維持している」が、ひとたび「生産地と消費地とが、近代輸送活動により空間的に分断され」と、商品は「故郷喪失者となる」、そしてベンヤミンの言葉を借りて、それをアウラの喪失として捉えた⁹⁸⁾。地域的特色の喪失による生産物の画一化、お土産の定型化は、戦後に一層加速した(キーホルダー、通行手形、ペナント、絵はがき、土産こけしや地名入り提灯など)。そして現在の土産にもなお顕著な現象である。中身は一緒の饅頭や煎餅が、地名と包装紙だけを変えて、日本のどこかの同じ工場で大量生産されている。

しかし川村清志によれば、そのような定型化された土産は、一見すると「一度きりの旅の経験を縮減し、魅力や価値を引き下げるようにもみえ」ながら、一方で「購入の敷居を下げるだけでなく、同じカテゴリーに分類されるモノを集めるという行為、コレクションへと人を誘う」⁹⁹⁾側面も有しており、旅行の動機の一つになっているという。定型化された饅頭や煎餅(の包装)を蒐集するコレクターは珍しいかもしれないが、同一キャラクターのご当地キーホルダーやグッズに一定の人気があることは、観光地の土産品売場をみれば明らかである。戦前においては同様の状況が「絵はがき」の蒐集にみられた。

2-3 土産菓子の意味と価値の変化

上記の視点にもとづいて、「開榮堂」の土産菓子が持つ歴史的な意味について確認する。

(1)土産菓子(商品)にあらわれた「郷土」

昭和9(1934)年の深浦駅開業、昭和11(1936)年の五能線全通を機に、深浦町の菓子店「開榮堂」では、「みず漬け」という土産菓子が創案された。この菓子は、古くからの特産品であった「ミズ」(ウワバミソウ)を素材として用い、「ミズ」にまつわる地元の「伝説」をモチーフにして、深浦という「郷土」を土産菓みに表現したものであった。その後創案された「観音もち」は、北前船寄港地に伝わる所謂「くじら餅」(に似た食感の餅¹⁰⁰⁾)に、深浦の名利・円覚寺の観音の名を冠して、地域性と独自性を表現した土産菓子であった。両者に共通するのは、土地固有の素材を用い、地域の歴史や伝説、物語を利用することで、深浦という「郷土」のアイデンティティを菓子によって表現し、県内外から訪れるツーリストに向けて広く発信していることである。当時は郷土教育運動の高まりに象徴されるように、前代から引き続いて「郷土」に対する自己意識がより一層明確になり、その一例として「日本新八景」「青森県八景」といった地域固有の「風景」が地域住民自身によって対象化(自覚)されると同時に、ツーリズムの隆盛とも相俟って「消費」の対象とする風潮が高まっていた。「みず漬け」「観音もち」はいずれも、深浦の一風景(前者は伝説的・物語的光景、後者は歴史的・文化的な光景)を菓子の上に再文脈化した商品であった。「郷土」意識(ひいてはナショナリズム)が消費を喚起し、消費が「郷土」意識を生み出すという循環の中で、観光客・地元客双方に受け入れられた。

(2)「土産菓子」に託される意味の変化

「みず漬け」は、深浦駅開業(昭和9)と五能線全線開通(昭和11年)を契機として創出された。当時は西海岸が「青森県八景」

の第1位に選ばれた時期とも重なっている。駅開業と鉄道開通、そして観光地としてのお墨付きは、観光客の増加につながった。当時、ごく一握りの日本人の間で盛り上がっていたツーリズムに呼応して、この菓子は「観光客」を念頭に創出されたものであった。同時に、鉄道開業・八景選出は地域にとっての慶事であり、菓子の創出は「地元客」向けに祝賀を記念する意味も持っていた。一方、のちに発案された「観音もち」は、戦時下における土産として人気を博した。戦勝祈願、戦死者供養のために澗口の観音さま(円覚寺)に参詣する人々が増え、門前近くにあった「開榮堂」では参拝のしるしとして「観音もち」が非常によく売れたという。すなわち、戦時体制下になると土産菓子の購入の動機や土産が持つ意味と価値に変化が生じ、社寺参詣のしるし、すなわち観音の利益を持ち帰り、利益を分配するという、宮筥(みやげ)の本来の意味合いが濃くなった。

それはパッケージにも現れている。開榮堂で当時販売されていた「観音もち」のパッケージをみると、185×84mmの大きなラベルのほかに、非常にコンパクトで美しい引き出し式の化粧函(50×157×26mm)入りの観音もちのパッケージが存在する(図16)。ラベルには円覚寺の建物が多色刷りで表現され、紙函は千代紙で彩られている。まさに、観音さまのありがたい御利益を象徴する、風格と高級感あふれるモダンなデザインであり、個別に分配する「特別なギフト」にふさわしい。

澗口の観音さま(円覚寺)への参拝客には、戦勝祈願や死者供養といった、各人の宗教的な表現を目的とする者だけではなく、本稿2-2(1)でみた歴史的状況がもたがるように、それらを建前とした西海岸への観光旅行を第一義とする者も多かったと考えられる。そのことは本稿2-1の証言からも推察される。昭和10年代の後半に向かうにつれ、観光旅行には建前が必要になりつつあった。「土産菓子」は、食品のうち真っ先に不要不急とされる「菓子」のなかでも、旅行という更に不要不急の行動において消費されることを目的とした商品である。「土産菓子」を社会情勢に適合するよう、どのように位置付け、意味づけるかという課題において、観音さまへの戦勝祈願・死者供養といった大義名分は、買う側だけではなく、売る側にとっても必要な、そして有効な表現であった。

3 まとめ

本稿では、昭和戦前期に創業した深浦町「開榮堂」の土産菓子にまつわる証言を記録するとともに、土産菓子上に表象された「郷土」と、戦時下における土産菓子の意味(位置付け)の変化について確認した。

当時は郷土に対する自己意識がより一層明確になり、地域固有の「風景」が地域住民自身によって対象化(自覚)されると同時に、ツーリズムの隆盛とも相俟って「消費」の対象とする風潮が高まっていた。土地固有の素材を用い、地域の歴史や伝説を利用することで、県内外から訪れる旅行者と地域住民を意識して「郷土」が表象された。「みず漬け」「観音もち」はいずれも、深浦という郷土の一風景(前者は伝説的・物語的風景、後者は歴史的・文化的風景)を菓子の上に再文脈化した商品であった。「郷土」意識(ひいてはナショナルリズム)が消費を喚起し、消費が「郷土」意識を煽るという相互のフィードバックがみられた。

当時の菓子店が、社会情勢の変動に応じて土産菓子の位置付けを柔軟に変化させていたことも明らかになった。「みず漬け」は、観光土産であると同時に、鉄道開業・八景選定などの慶事を記念する菓子だった。一方、少し遅れて発売された「観音もち」は、当初はみず漬け同様の観光土産として創出されたが、霊験あらたかな観音の名を冠することから、戦時体制下には「戦勝祈願」「戦死者供養」の土産として求められるようになり、菓子屋もそれに乗じた。食品のうち第一に不要不急とされる「菓子」のなかでも、観光旅行という更に不要不急の行動において消費されることを目的とした商品である「土産菓子」を社会情勢に適合するよう、どのように表現するかという課題において、観音への戦勝祈願・死者供養という位置付け・意味付けは、買う側にも売る側にも有意義なものであった。

謝辞

本稿執筆にあたり、相馬英子氏、相馬博氏、西崎公慶氏、山内智氏、山崎康裕氏、山谷聖也氏、佐藤良宣氏、滝本敦氏(順不同)より御教示ならびに資料の提供を受けました。記して深く感謝申し上げます。



図15 展示された「開榮堂」関連資料
令和5年度 連携展「あおり旅ものがたり」
会場:深浦町歴史民俗資料館



図16 「観音もち」の化粧函(昭和戦前期)

注

2)深浦町を対象とした民俗調査には、森山泰太郎氏による「大山の民俗」(『深浦町史』所収)、青森県立郷土館による「関の民俗」(青森県立郷土館調査報告書)などの調査報告があるが、いずれもいわゆる「農・山・漁村」の「伝統的」習俗だけが観察・記録の中心になっており、菓子屋など町場の生活は記録されていない。一方、平成12(2000)年に発行された『ふかうら風土記』(深浦町老人クラブ連合会・西崎正孝編)は、老人クラブの方々による自由でバラエティに富んだ証言が多数掲載されており、「開榮堂」の「みず漬け「観音もち」については、同店を創業した相馬順三氏(故人)の子息である相馬文之助氏による回顧録が掲載されているほか、同じく深浦の名産であった「あなごの燻製」「わかめ羊羹」などについて、製造者自らによる手記が掲載されている。近年、深浦町と岩崎村(現深浦町)の合併15周年を記念した『深浦のあゆみ』(深浦町編2021)が刊行され、同書には「開榮堂」の土産菓子について、相馬文之助氏への直接の聞き取り形式で紹介されているが(同書p.230)、相馬英子氏に確認したところ、英子氏も文之助氏も、「開榮堂」に関する聞き取りは受けたことがないとのことであった。だとすれば、開榮堂についての相馬家への聞き取りと記録は、本稿が初めての試みであり、また文之助氏による回顧録を補完する意義もある。

3)2023年7月27日

4)連携展「あおり旅ものがたり」は、前年度に「巡回展」として開催した展示内容に深浦町の関連資料を加味して再編した企画展示である。展示資料の概要は佐藤良宣・滝本敦・増田公寧2022「あおり旅ものがたり—青森の名所と交通の歴史」(展示カタログ)を参照。同カタログは、青森県立郷土館50周年記念HP「特別展示のあゆみ」からダウンロード・閲覧可能(無料)。

5)深浦町編1977『深浦町史』(上)pp.394-395 6)同上pp.394-396

7)菅江真澄1979『つがろのをち』,内田武志・宮本常一編訳2000『菅江真澄遊覧記』p.319

8)昭和9(1934)年発行の『深浦町誌』より。出典は深浦町編1977『深浦町史』(上)p.323

9)相馬文之助2000「深浦の観光みやげ『みず漬け』」深浦町老人クラブ連合会・西崎正孝編2000『ふかうら風土記』pp.204-205

10)『東奥日報』明治35年4月20日「深浦の昨今」 11)青森県医師会編1928『青森県遊覧指針』p.37

12)船水清1966『わがふるさと』第一編第二編合本pp.51-52

13)相馬文之助2000「深浦の観光みやげ『みず漬け』」西崎正孝編2000『ふかうら風土記』pp.202-205

14)青森県医師会編1928『青森県遊覧指針』pp.36-37 15)深浦町観光協会(深浦町)を訪問し、同協会の職員に確認(2023年7月27日)

16)池本有一2006「菓子製造業の企業整備」原朗・山崎志郎編著『戦時日本の経済再編成』pp.295-296 17)同上pp.296-301

18)一戸恭三1964『青森県菓子共同組合史』pp.101-103 19)同上pp.101-103

20)池本有一2006「菓子製造業の企業整備」原朗・山崎志郎編著『戦時日本の経済再編成』pp.301-305

21)Kenneth J. Ruoff 2010.*Imperial Japan at Its Zenith: The Wartime Celebration of the Empire's 2,600th Anniversary*,pp.7,102、高岡裕之1993「観光・厚生・旅行—ファシズム期のツーリズム—」,赤澤史朗・北河賢三編著『文化とファシズム』pp.9-52など

22)白幡洋三郎によれば、旅行ブームのピークであるとされる昭和15年の皇紀二千六百年記念の年には、万国博の無期限延期とオリンピック中止の反動から、この祝賀の機会を旅行の好機として「聖地巡拝」等の名目で、檀原神宮や伊勢神宮、九州宮崎神宮などに旅行者が押し寄せたが、JTBの取り扱った旅客数は490万人、「当時の国民の約5%」にあたるという(白幡洋三郎1996『旅行のスヌメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』pp.99-101)。この490万人という数字を以て、戦前戦中にあっても「何百万人もの人衆」「多くの日本人」が、海外を含めて観光旅行を楽しんでいたように論ずる向きがあるが(後述 *1 参照)、何百万人といっても当時の国民全体のわずか5%に過ぎない。繰り返し強調するが、旅行を楽しめたのは日本人のうち「ごく僅か」である。 *1)Kenneth J. Ruoff 2010.*Imperial Japan at Its Zenith: The Wartime Celebration of the Empire's 2,600th Anniversary* では‘so many individuals visiting imperial heritage sites in 1940’(p.102),‘It is nonetheless impossible to reconcile the booming tourism sector with the notion of wartime Japan having been a dark valley’(Ibid.,p.103)と述べられているが、聖蹟観光に出かけられたのは日本人全体から見ればごく少数であり、‘By 1940 many middle-class Japanese used cameras to record visual images, including moving images, of their trips’(Ibid.,p.83)とRuoff自身が述べているように、撮影機材を持って旅行に行けるようなほんの一握りの都市中産階級に限ったことであって、それを以てso many individualsとはいえない。この「多くの人々が」という表現は、日本の読者向けに書かれた前文で繰り返し使用されている。一握りの都市中間層の動向を以て「日本人」を語っている点には注意が必要である。圧倒的多数を占める、地方の農山漁村の人々が完全に視野から欠落している。それは大正から昭和初めの生活改善諸活動において農山漁村の庶民が視野に入っていないことにも似ている。また、‘The discourse, symbolism, and mnemonic sites of which Japanese tourists availed themselves were designed to foster their support of the militaristic expansionist policies of the time’(Ibid.,p.105,emphasis added),‘The state endeavored to direct leisure travel toward heritage sites’(Ibid.,p.105,emphasis added)としながらも、‘in the end the decision to visit these imperial heritage sites was a voluntary one made by consumer’(Ibid.,p.105,emphasis added)であるとし、‘The stress here is on the self-administered nature of the imperial heritage tourism that millions of Japanese engaged in at the time of the 2,600th anniversary celebrations, not on the role of the state’(Ibid.,p.105,emphasis added)ということを結論としてとりわけ強調する意図は何だろうか。そもそも一般論として「主体性」「自主性」とは何か(人間は「主体的に」行動しているのか)ということ、またこのケースでは、聖蹟観光が熱を帯びた「ブーム」であった点、それが国家によって演出され差し向けられ操作されたものであった点で、大衆がおよそ自らの責任においてそれを選択したということとはできないのではないか。

23)高岡裕之1993「観光・厚生・旅行—ファシズム期のツーリズム—」,赤澤史朗・北河賢三編著『文化とファシズム』pp.9-52

- 24) Kenneth J. Ruoff 2010. *Imperial Japan at Its Zenith: The Wartime Celebration of the Empire's 2,600th Anniversary*, p.25 'The boom in tourism, publishing, and retail sales(e.g., department stores) peaked at the time of the 2,600th anniversary celebrations'
- 25) Op.cite., p.7 'tourism (*kankō*) remained vibrant in the late 1930s, peaked in 1940 even though by that year Japan was in its third year of war in China, and continued to be popular into 1942 (the year after Japan commenced hostilities with the United States and Britain)' すなわち昭和17(1942)年の日米開戦の年まで観光旅行の人気の続いていた。 26) 同上 p. 105
- 27) 山本志乃2021『団体旅行の文化史 旅の大衆化とその系譜』pp.144-150
- 28) 赤井正二2016『旅行のモダニズム 大正昭和前期の社会文化変動』pp.3-14
- 29) 同上 pp. 178-179 30) 同上 p. 184 31) 同上 p. 194 32) 同上 p. 202
- 33) 参考までに、例えば団体旅行については、地元紙「東奥日報」によると、昭和11(1936)年の団体旅行については、6月の修学旅行シーズンには中等学校の行き先は京都・奈良・大阪・東京方面、小学校は県内が多く、遠くても函館秋田であったが、青森駅では6月に約19,000人の団体の旅客数があったという。そのうち一般客は約150人だった(東奥日報昭和11年5月21日「旅行シーズン 団体の申込に忙殺の青森駅 約二万のお客様を取り扱ふ」)。
- 34) 柳田國男1934「旅人の為に」,1941『豆の葉と太陽』,1968『定本柳田國男集』第二巻,p.417
- 35) 柳田國男1931『明治大正史 世相篇』,柳田國男1970『定本 柳田國男集』第二十四巻p.272
- 36) 同上 p.271 37) 同上 p.270 38) 同上 pp.260-272
- 39) 柳田國男1934「旅人の為に」,1941『豆の葉と太陽』,1968『定本柳田國男集』第二巻,p.428
- 40) 柳田國男1931『明治大正史 世相篇』,柳田國男1970『定本 柳田國男集』第二十四巻pp.261-262
- 41) 柳田國男1934「旅人の為に」,1941『豆の葉と太陽』,1968『定本柳田國男集』第二巻,p.423
- 42) 柳田國男1928『雪国の春』,1968『定本柳田國男集』第二巻所収,pp.53-54
- 43) 柳田國男1927「旅行の進歩及び退歩」,1928『青年と学問』,『定本柳田國男集』第二十五巻,pp.109-120
- 44) 柳田國男1927『をがさべりー 鹿鹿風景談ー』,1928『雪国の春』,1968『定本柳田國男集』第二巻p.136
- 45) Daniel J. Boorstin 1961, *THE IMAGE or What Happened to the American Dream*, Chapter3, 'From Traveler to Tourist: The Lost Art of Travel', Section2.3, (pp.84-114)。例えば 'This change can be described in a word. It was the decline of the traveler and the rise of the tourist.' (pp.84-85), 'The traveler was active; he went strenuously in search of people, of adventure, of experience. The tourist is passive; he expects interesting things to happen to him' (p.85)。
- 46) 'But while an "adventure" was originally "that which happens without design; chance, hap, luck," now in common usage it is primarily a contrived experience that somebody is trying to sell us' (Ibid., p.78, emphasis added), すなわちもともとは偶然性にその本質があったものが、今や誰かが売りつけようと企む 'prefabricated adventures' (Ibid., p.117) へと変わってしまったと論じている。
- 47) 柳田國男1931『明治大正史 世相篇』,柳田國男1970『定本 柳田國男集』第二十四巻p.261 48) 同上 p. 262 49) 同上 p. 263
- 50) 柳田國男1934「旅人の為に」,1941『豆の葉と太陽』,1968『定本柳田國男集』第二巻,p.429 51) 同上 p. 420
- 52) 柳田國男1931『明治大正史 世相篇』,柳田國男1970『定本 柳田國男集』第二十四巻pp.255-272
- 53) 弘前市企画部企画課編『新編 弘前市史』年表・索引編p.168「昭和十三年 二月二十一日、NHK弘前放送局、ラジオ放送を開始」
- 54) 柳田國男1931『明治大正史 世相篇』,柳田國男1970『定本 柳田國男集』第二十四巻p.272
- 55) 山路勝彦2017『大正・昭和戦前史・博覧会篇』 56) 鈴木雄一郎2013『おみやげと鉄道』pp.98-99
- 57) 青森・弘前両市にはすでに大正期以前に物産陳列場が設置されていたが、昭和9(1934)年に「八戸物産館」が開設された。また、例えば戦時下の昭和15(1940)年においても、青森県物産宣伝会(東京)、第5回奥羽・北海道工産物共進会、第6回工産物共進会(八戸)、日満産業大博覧会(富山)、東北銘産品陳列会(東京)、一道九県林産物共進会(福島)、東北六県工芸品競技展(弘前市)、東北農村工芸品展覧会(東京)、青森県見本市(関東4ヶ所、道内4ヶ所を巡回して開催)など多数の物産展が開催され、本県の物産が出品展示されている(東奥日報社1940『東奥年鑑』pp.264-266)。
- 58) 同年発行の「博物館研究」では先進的事例として2例を挙げているが、それらは奇しくも本県に隣り合う函館と秋田の両師範学校である(「文部省の郷土室施設奨励」,「博物館研究」1930,3巻10号,pp.4-5)
- 59) 平山和彦1982「郷土教育運動と郷土史教育」,加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編『講座・歴史教育1 歴史教育の歴史』pp.194-209。雑誌『郷土』の創刊(昭和5年)など「郷土誌」「郷土史」関係の刊行物の出版数から郷土教育運動を分析した平山和彦によると、(郷土教育に関する)「解説書、研究・実践報告書類の出版は[筆者注:昭和]六年あたりをピークとしている」(p.194)、「郷土教育運動は決して昭和六年あたりをピークに、その後下降したわけではもちろんなく、現実には四年ごろから十年近くも展開したことが推定される」(p.202)という。そして、数は極めて少ないとはいえ、17年~19年にもその種の刊行物の刊行が続けられていた(p.202)。
- 60) 「郷土博物館の建設」,「博物館研究」1929,2巻1号pp.9-10
- 61) 満州事変に際しては、博物館の使命は挙国一致を促し軍と民間の楔となり国体を明徴にし皇国日本の全貌を示すことであるという(「事変と博物館」,「博物館研究」1937,10巻10号p.1)
- 62) 同博物館については、中野渡一耕「翼賛文化運動と『青森県郷土博物館』」で詳細に論じられている。同館は皇紀二千六百年記念事業の

- 一環として建設され、「皇室関係資料」「忠誠関係資料」など、皇室との関係における郷土資料を蒐集し観覧に供することが目的として上位に掲げられていた(中野渡一耕1996『翼賛文化運動と『青森県郷土博物館』』『青森県立郷土館調査研究年報』第20号,pp.103-114)。
- 63)大間尋常高等小学校「水産標本室」(昭和4)、青森師範学校内「郷土室」(昭和6)、大間尋常高等小学校「大間北日本博物館」(昭和11)など。詳しくは菊池智子・山内智・宮野正範2023「大間北日本博物館の変遷」pp.151-152参照。多くはその名称に「郷土」を冠する資料室であったが、昭和11(1936)年に開設された「大間北日本博物館」は、青森県内において博物館という名称を使用した嚆矢である可能性が高く、菊池・山内・宮野らが近年その実態についての解明を進めている。この博物館は、小学校に併設されたいわゆる郷土資料室であった。余談になるが、棚橋源太郎は小学校併設の学校博物館については否定的で、展示内容の固定化がかえって児童生徒の興味を殺ぎ、探求心を鈍らし、教育上の効果に乏しいことや、経済的浪費の観点から「賛成できない」と述べている(「郷土博物館問題」「博物館研究」1930 3巻1号pp.4-5)。
- 64)川西英通1991『翼賛運動と地方文化』,馬原鉄雄・掛谷幸平編『近代天皇制国家の社会統合』,p.183
- 65)中野渡一耕1996『翼賛文化運動と『青森県郷土博物館』』『青森県立郷土館調査研究年報』第20号,p.112
- 66)金子直樹2003『勝ち抜く行事－翼賛文化運動における祭礼行事・民俗芸能の「活用」』,「郷土」研究会編2003『郷土 表象と実践』,pp.117-126。深浦では昭和17(1942)年8月に深浦国民学校において盆踊りとねぶた笛太鼓が披露され、600名の観衆を集めている(同書p.118)。
- 67)同上,pp.108-131 68)「東奥日報」昭和11年2月2日「国立公園に指定」
- 69)青森県史編さん近現代部会編2005『青森県史 資料編 近現代』4, p.368
- 70)「東奥日報」昭和11年6月5日「景勝地投票結果」－総投票64万6000 深浦海岸に凱歌挙る 有効投票数646,229票－より。第1位が「深浦海岸」の143,940票、第2位が「十二湖」の97,837票、第3位が「権現崎」、第4位が「石川公園」、第5位が「野木和公園」であった。この結果を受けて「各都市代表景勝地二十四勝」が選定され、その中から「青森県八景」が選定された。選定されたのは「夏泊半島」(東津軽郡)、「西海岸」(西津軽郡)、「目屋溪」(中津軽郡)、「浅瀬石川温泉溪谷」(南津軽郡)、「権現崎」(北津軽郡)、「恐山、薬研温泉」(下北郡)、「鷹揚園」(弘前市)、「種差海岸」(八戸市)であった(東奥日報社1936『東奥年鑑』pp.556-559「本社主催県下代表景勝地選定」も参照)。
- 71)「東奥日報」1936年5月1日「青森県代表景勝地選定」,5月14日「県下景勝地投票」,5月17日「俄然台頭の権現崎」,5月18日「深浦海岸突如2位」,6月5日「景勝地投票結果 総投票64万6000 深浦海岸に凱歌挙る」
- 72)白幡洋三郎1996『旅行のススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』p.66
- 73)館田勝弘2005「解説 第一節 十和田国立公園指定と観光開発」青森県史編さん近現代部会編『青森県史 資料編 近現代』4 p.368によると、十和田湖を日本新八景に入選させる運動が県や自治体をあげて組織的な運動として展開されたようである。
- 74)荒山雅彦2003『風景のローカリズム－郷土をつくりあげる運動』「郷土」研究会編『郷土－表象と実践－』p.91 75)同上p.101 76)同上p.101
- 77)白幡洋三郎1996『旅行のススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』p.66 78)「東奥日報」1936年5月14日「県下景勝地投票」
- 79)丸山宏は、「これほどまでに盛り上がった企画ではあったが、選出された『日本八景』の寿命はそれほど長続きするものではなかった。日本の風景を選び出すには絶大な効果をもったといえるが、結果的には一大ブームを起こしたに過ぎない」と述べている(丸山宏1993『近代日本における公園の社会的受容』p.260)。
- 80)橋爪伸子2017『地域銘菓の誕生』pp.7-12 81)神崎宣武1997『おみやげ 贈答と旅の日本文化』
- 82)同上pp. 115-125 83)同上pp. 188-20 84)同上p. 200 85)同上p. 198 86)同上pp. 199-200
- 87)鈴木雄一郎2013『おみやげと鉄道』。鉄道については同書pp.27-55,博覧会についてはpp.98-126,軍隊と戦争についてはpp.130-169。
- 88)同上p.249 89)同上。「出品物のランク付けは、出品者たちの競争心を喚起し、物産の改良に結びついていく」(同書p.113)、また「新奇な商品の普及と拡大にとって、内国勸業博覧会という場は絶大な効果を発揮した」(p.124)。その後明治44(1911)年になると、「菓子飴大品評会」によって菓子が一つのジャンルとしてより明確化され、昭和10(1935)年の仙台から「全国菓子大博覧会」の名称で今日に至るが、戦時下にあっても昭和13(1938)年まで開催されている(pp.120-121)。 90)同上p.251 91)同上p. 242。鈴木は『おみやげと鉄道』(2013)よりも前の著作では、みやげの条件として①その場所に特有の物産であるという由緒(物語性)、消費期限の関係から②鉄道による移動時間の短縮、持ち運びを容易にするための③容器の改良、の3点つが重要な要素であると述べている(鈴木雄一郎2010『近代おみやげ考』,国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告』第155集,P146-147)。容器の改良については、明治36(1903)年の第五回内国勸業博覧会審査報告書において、特に「容器」という項目を設け、菓子の貯蔵保存および運搬という実用性だけでなく、菓子の価値を左右するイメージに繋がる要素として重視されていた。また、従来から用いられていた木箱に代わる紙箱の利用も課題になっていた(第五回内国勸業博覧会事務局編1904『第五回内国勸業博覧会審査報告』第一部巻之九pp.172-178,及び200)。つまり菓子容器の①保存性、②携帯性、③装飾性が、菓子の評価ひいては消費者の購買意欲に影響を与えた。これらの点で、開榮堂の「観音もち」「みず漬け」はいずれも要件を満たしている。
- 92)川村清志2018「現代におけるおみやげの諸相」,国立歴史民俗博物館編2018『ニッポンおみやげ博物誌』pp.56-77 93)同上p.55
- 94)鈴木雄一郎2013『おみやげと鉄道』p.252 95)同上pp.102-103。江ノ島の貝細工を例にとれば、原料は国内外から取り寄せて量産し、国内の各観光地向けに広く卸すようになっていたという。 96)同上p. 170 97)同上p.171参照。近隣の観光地はおろか、遠方の観光地向けに土産が作られ、「全国の著名な郷土みやげが手に入るような状況」であったという。
- 98)ヴォルフガング・シヴェルプシュ、加藤二郎訳1982『鉄道旅行の歴史:19世紀における空間と時間の工業化』pp.56-57,59-60(原著1977)
- 99)川村清志2018「現代におけるおみやげの諸相」,国立歴史民俗博物館編2018『ニッポンおみやげ博物誌』p.55
- 100)深浦町老人クラブ連合会・西崎正孝編2000『ふかうら風土記』p.205